

さくらば節子市政報告

平成27年度 第2号



7月25日「ママのきもち@上越」主催：働くママ達の声を高鳥衆議院議員にも聞いてもらう



4月30日

市内の事業者の障害者雇用に関する課題を担当課と協議する

ごあいさつ

市民の皆さま、すっかり秋も深まってまいりましたが、お元気でお暮らしですか。

二人のノーベル賞受賞の科学者や、数々のスポーツイベントにおける日本選手たちの活躍には本当に目を見張るものがありますね。安全保障法案が決まり内閣改造が行われた今、政府としてはこれからの日本の方向を決めていくために、何としても経済政策を成功させよう、地方創生を実現しようとしています。景気を上向かせていくことはもちろんとても大切ですが、それに合わせて「どうしたら国民生活の満足度を上げていくことができるのか」を真剣に考えていかななくてはなりません。経済的安定と同時に、人が生きる幸せを感じるためには何が重要なのかをもう一度見つめなおして、家庭や社会での私の生き方を考え、人間関係も改善していきたいものです。

1. 今こそ人口減少問題と向き合う

上越市に創造行政研究所が設置された当初からずっと、人口動向のデータが分析されてきました。そこから推測できる今後の上越市の人口構成は驚愕すべき内容です。つまり我々にはもう後がない。下の表をご覧ください。平成17年から26年までの人口減少の傾向をとらえて予測した場合、25年後の平成42年で人口が減らないと見受けられる区は頸城区のみです。減少率が一番高いとみられる牧区ではなんと平成17年から25年間で43%に落ち込んでしまいます。旧東頸城を先頭にして、全市の生活環境がすべて急激に変化していく事でしょう。

議会の「人口減少問題対策特別委員会」でも、次年度に向けての数点の提案をまとめています。

国、自治体、地域のそれぞれができることを整理して、徹底して実行しなくてはなりません。

私たちが地域を守っていくためには、この過酷な現実をまず受け入れた上で、これから地域をどうすればいいのかを話し合い、実現可能なプランを立てて実践していく事が重要です。私自身も牧区の住民としては大変深刻です。

そしてこの問題は実は高齢者の問題ではありません。あと15年後に地域の中核を担っているのは、誰ですか。まさに今の30代・40代の皆さんです。厳しい現実ですが自分たちの未来のためには、若い世代の皆さんこそが、今の50代・60代としっかりタッグを組んで、この問題と取り組んでいかななくてはならないのです。

これからは、たとえ人口が半分になっても生活できるシステムを作ること、地方創生の波に乗って、困難な中でも地域の特色を見出して、それを経済活動に繋げていくこと、そのような努力によって一人でも多くの方が上越市を訪れ、定着を視野に入れた移住をしてくれることを目指して行きましょう。

地区名	平成17年 A	平成42年 B	B/A (%)
合併前上越市	134,313	116,356	86.6
安塚区	3,340	1,813	54.3
浦川原区	4,032	2,940	72.9
大島区	2,249	1,200	53.4
牧区	2,614	1,141	43.6
柿崎区	11,484	7,899	68.8
大湍区	10,401	7,278	70.0
頸城区	9,746	9,974	102.3
吉川区	5,142	3,281	63.8
中郷区	4,733	2,504	52.9
板倉区	7,512	7,223	96.1
清里区	3,152	2,698	85.6
三和区	6,190	5,556	89.8
名立区	3,169	2,007	63.3

2. 私の一般質問

9月議会（9/16）

● 「空き家」の活用について

点在する老朽危険空き家の早期除去と同時に、空き家の有効活用が全国的な課題となっています。このような折「上越市空き家等の適正管理、及び活用促進に関する条例」が施行され、16条では空き家情報の収集と空き家バンク等の設立を、18条では空き家情報の公開と活用促進を市の努力義務として明文化しています。

しかし現状は市内に9000戸はあるとされている空き家のうち932戸しか情報が上がっていません。空き家バンクも民間に任せるかどうかを未だ検討中として対応が遅れています。

また市は、「窓口は建築住宅課にあるが、法的な問題も絡むので財務・総務、活用促進の面から自治・市民環境部を合わせた全庁的な対策会議を持ってこれに対応していく。」としています。しかし私は、責任の所在が明確でないことで、対応がさらに遅れていくのではないかと危惧しています。空き家を使った移住促進施策が活発に組み込まれている自治体が増える中、少なくとも市のホームページには空き家情報がしっかりとリンクされなければならないと思います。早期の対応を迫り、「今年度内には方向性を定める」という部長の約束をいただきました。

今全国の地方都市は移住者争奪戦の状況となっております。先日「人口減少問題対策特別委員会」で東京の「ふるさと回帰支援センター」を訪れましたが、飯山市のブースは単独で新潟県が持つ広さに匹敵するものを持っていました。移住者を受け入れるには安価な

住居、生活するに足りる収入、移住の前後を支える地域組織、これらが重要な成功の条件となってきます。

先進地域の施策を十分に研究したうえで、この三要件をそろえたモデル地区を上越市内に設立し、市役所の全面的な支援のもとに移住施策の突破口を開いていくべきだと主張しました。

一つ希望的なことは、上越タイムズにも詳しく載りましたが、今年度「学生に町家の空き家を利用したシェアハウスに住んでもらおう」という事業が進められている件です。旧市街の町家三軒で計画が進行中です。学生たちの活力に期待できますね。

● 「通いの場」と生活支援コーディネーターについて

4月よりスタートした新地域支援事業で各区に高齢者のためのサロンが生まれました。ただし今回はただ健康のために「通いの場」を作っただけでなく、地域で元気に活躍しておられる皆さんが自らプログラムを考えていく、地域づくりの一環としてのサロン事業を目指しています。

13区では元の町村役場の代行のような地域組織がそれぞれNPO法人として存在するので、「通いの場」はそれらの組織が請け負ってスタートしました。

旧市街地では当面は社協が代行していますが、今後担当する組織をどのようにして立ち上げるかという課題を持っています。

私は民間も含めて、すでに存在するサロン活動を土台にして、そこから広げていったら良いのではないかと思ったのですが、市は定点でしっかりとプログラムを持った「通いの場」を運営して、そこに地域ですでに活動しているグループを連携させていく計画です。

いずれにしても、それぞれの組織には「生活支援コーディネーター」がひとり配属になります。このコーディネーターさんがこれからの「通いの場」事業を成功させるカギとなりますので、今後どのようにして、研修を行い、活動の支援をする下部組織を作っていくのかを尋ねました。今後も現場の実情を加味してさらなる工夫をしていく事が重要です。



3. 動物愛護のすすめ

県動物愛護センターの情報によると、上越市でも毎年200件を超す虐待や放置、地域猫問題に関連した通報が入るそうです。中でも昨年は50匹を超える猫の多頭飼育崩壊（ペットが繁殖などで増えすぎ、適切な飼育が困難になってしまうこと）が発見されました。動物愛護団体の皆さんが一年かけて、猫たちの治療と避妊・去勢を行い、新しい飼い主を捜し、事態はやっと収拾されつつあります。

そもそもなぜ地域に捨て猫が溢れてしまうのか、飼い主の責任意識が不足しているからです。子猫のうちがかわいがられ、大きくなり世話できなくなると捨てられた猫たちが、避妊されることなく増え続けた結果が地域猫（野良猫）問題です。また多頭飼育崩壊を引き起こす飼い主には、何らかの精神的な援助が必要だと言えます。

今全国には動物愛護条例等を制定して、ペットの飼い主の責任を明確にしながら、市民の動物愛護意識を啓蒙している自治体が多くあります。上越市も今後はあらゆる機会を使って、市民と動物の正しいかわり方を学ぶ場を作るべきでしょう。願わくは長岡市にある県動物愛護センターや新潟市の動物ふれあいセンターのように、子供も大人も動物と交わりながら、しつけ方を学ぶことができる楽しい施設があると最高ですね。

なお動物愛護の件について一般質問をしましたが、健康福祉部長が広報上越を使って市民への啓蒙活動を積極的に行う事を約束してくれました。地域猫等への避妊・去勢手術費用の軽減化に関しては、上越市では自前の保健所がなく、県の保健所の指導に準じて対応しているため、まだ特別な取り組みはありません。市として何ができるか、財政上の課題を含め、福祉課部長自ら県へ出向いて相談することを約束してくれました。

あとは学校教育課に、子供たちへの動物愛護教育を授業に取り入れることを検討していただけるようお願いしてみます。

さくらば節子 市政報告 平成27年度第2号

発行日：平成27年10月15日
発行：櫻庭節子
住所：〒943-0648
上越市牧区小川1590番地
電話・FAX：025-546-7835
電子メール：
office@sakuraba-setsuko.jp

公式サイトもご覧ください。
<http://sakuraba-setsuko.jp>
(FBもやってます)

女性の声を市政に

随想

大変お世話になった方が、先日病気で亡くなられた。この夏お元気に仕事をされる姿を拝見したばかりだったのに。あまりに急速な病状の悪化に、若い世代にとっての癌という病気の恐ろしさを改めて思い知らされた。故人のご冥福を祈って止まない。

最近議員仲間を含めて私の周りでは、まるで申し合わせたようにたくさんの方が病気で入院した。そんな折、地域の体育館でいつものように乳がん検診を受けた私に、生まれて初めて「要再検査」の通知が届いた。「再検査、なんて嫌な文言だろう！」気分はいっぺんに暗くなり、最悪の事態を想像してしまった。幸い精密検査の結果は「特に異常なし、でも心配が残るので今後は頻繁に検査を受けること」。

今まで能天気にも病気のびの字も考えたことがなかった天真爛漫な私の人生よ、さようなら。命には限りがある。私を支えてくれる家族や支援してくださる人々がたくさんいて、まだそれらの皆さんのお役にまったく立てていないではないか。できる限り注意して、仮に病気になったら早期発見して、最大限の治療をしよう。それでもいつかは自分の命の限界と向き合う日が来るだろう。その時に、「やれることは最大限やってきた」と思える自分でありたい。

